

私の歩んだ道

石田 康幸*

1 はじめに

いよいよ、2010年3月31日付で、埼玉大学教育学部を退職することになった。教育学部には約31年間お世話になることになる。人生の半分近くが教育学部にかかわった生活であり、この間こそが筆者の人生の中心、“花”であったと思っている。

そこで、本来、在職中の主要な出来事について記述することを中心とすべきであるとは思いますが、“激動する時代に生まれ、激動する時代に青春を過ごした”と自認する筆者の立場から、出生以来の自身にかかわるであろう様々な出来事の概略も述べてみたい。

なお、特に小学生頃までは、記憶が不鮮明な個所が多いので、生存する家族の中で筆者の出生時に既に旧制の女学校の生徒であった長姉等の話を参考に記述することとする。

また、話の中に登場する人物名は、プライバシー保護の観点から、必要に応じてイニシャル等を使用させていただくことにした。また、伝聞資料等による記述の場合、事実誤認等が認められる可能性があるが、その点をご容赦願いたい。

2 出生から中学生まで

筆者は1944（昭和19）年9月26日に東京都大田区大森で、7人兄弟の末っ子として生まれた。当初は松竹蒲田撮影所、1936（昭和11）年の移

転後は大船撮影所の電気技師であった父は、当時陸軍軍属として戦意高揚を目的としたニュース制作のためにシンガポールに滞在中であった。

1945年になると、長兄は静岡、次兄は岩手へ学童の集団疎開で家を離れた。同年3月10日の東京大空襲の後、住居のあった第一京浜国道の両側約100mずつは建物取り壊しの命令により更地となることとなり、残った家族全員が区内調布嶺町の借家へ移住した。

記録によると、この地域にも3回の空襲があり、わが家と道を挟んだ高台一帯の民家も焼失した。そう言えば、わが家と隣家の境となっていた柵の植え込みの株元に、上部に羽の付いた子どもの身長位の不発弾が突きささっていたが、ある日、米軍人らしき人々が来て、どこかへ持っていったことを記憶している。

調布嶺町は台地、傾斜地及び低地で成り立ち、台地は屋敷、傾斜地は屋敷と畑、低地は水田が広がる地域であった。幼少時代はこの畑や水田、また、水田の水源地でもある水神様の湧水池などで泥だらけになるまで遊びこけた。

1951年に隣町の田園調布南にある大田区立東調布第一小学校へ入学した。麻疹のため通常より約1週間遅れて入学したことが原因か学校に馴染めず、低・中学年の時期はさぼり癖がつき、週に1～2回は登校せず、自宅の前の雑草が繁茂する高台の草叢にランドセルを隠して、水神様や田畑で遊んでいた。その頃は朝鮮戦争（1950～1953年）の最中で、近所の大人に混じって、小川での鉄くず採取などの手伝いを遊びを兼ねて行ったことを記憶している。

しかし、高学年になって、小野先生が担任と

* 埼玉大学教育学部技術教育講座

なってからは、態度が良好となり、勉強にも熱が入った。先生の「おまえは、やればできる。」との温かい励ましが、身にしみたからである。この先生は、授業も熱心であったが、休み時間には児童と遊び、体育の授業を近くの多摩川の河川敷で実施するなど、様々な工夫が見られた。また、休日には、希望者を後楽園球場や、目黒の自然教育園へ連れ出すなど、児童とのコミュニケーションを非常に大事にしていた。素敵な先生との出会いが人生の転機となったのである。

1957年に同小学校と道路を挟んだ向かい側にあった、前年新設された区立東調布中学校へ入学した。同校の野沢校長は千代田区立麴町中学校の教頭時代、中央教育審議会の委員を務めた人とのことで、若く優秀な先生を多く集め、精力的な学校運営を行っていた。学力向上や平穏な学校作りに尽力されたようで、「生きた至宝となれ！」との学校教育目標のもと、生徒会や生活委員会による「生徒の自治」を推進された。また、先生は優等賞・努力賞・体育賞などを設け、毎年数十人に授賞されるなど、学力に加えスポーツ振興にも努力されたようであった。

また、当時は小・中学校のほとんどの教員を組織していた日本教職員組合（日教組）を中心とする勤務評定反対闘争の最盛期であったが、同校の組合員の集会参加等は少なかったようであった（小学校のクラス会での小野先生の話）。

一方、野沢校長は中教審の元委員らしく、「日の丸」、「君が代」の掲揚・斉唱を推進し、学校の行事の際には、「国旗掲揚・降納」、「国歌斉唱」との号令を常に耳にした。また、運動会の際には、毎回、校旗を先頭に一糸乱れぬ分列行進が実施された。その際、筆者は生徒会の役員として、校旗の支持台を保持して、先頭を歩かされたものである。また、野沢校長は例の「偏差値」を全国で2番目に導入したり、新校舎建設に際して、区教委と直談判して、屋上に全国でも珍しい天文台を設置したとのことであった（同期会での野沢元校長の話）。

同校では、辰嶋先生との出会いが筆者へ大き

な影響を与えた。先生は、筆者を一本釣りで演劇部に勧誘、準主役を与え、区立中学校の連合演劇祭に出演させてくれた。この経験が筆者の人間性の解放に大いに役立ったようである。また、先生は3年生の「バス旅行」で、筆者が海軍飛行予科練習生（予科練）にかかわる軍歌を歌ったところ、「石田君があんな歌を歌うとは思わなかったよ。」と言われ、阿川弘之の「雲の墓標」を貸して下さった。このことと本の内容が、それまでどちらかといえば右翼的であった筆者の心に大きな変化をもたらしたのである。

また、埼玉大学着任後、奥谷助教授（当時）に、筆者が同校在校中に、当時学生であった奥谷助教授が同校の非常勤教員として勤務されていたと聞き、卒業アルバムを見たところ、教員集団の一員として写真に写っており、世間は狭いものだったもののである。

1959年4月に当時の皇太子明仁親王と正田美智子さんが結婚され、全国民の話題となった、ご成婚のパレードを友人の家の白黒テレビで拝見し、心を躍らせたことを覚えている。

同年9月には、死者・行方不明者が5,000人以上となった、戦後最大級の伊勢湾台風が東海・近畿地方を襲った。生徒会では学級委員会の審議を経て、義援金の全校カンパを実施し、数日で数万円を集め、読売新聞城南支局に託した。このことは、校長先生はじめ先生方を喜ばせたようであった。

3 高校生から大学生時代まで

1960年に目蒲線（当時）武蔵小山駅前にある東京都立小山台高校へ入学した。入学式後の最初の朝礼で、当時生徒会会長であった、あの教育技術法則化運動の主宰者として一世を風靡した向山洋一氏が、朝礼台に立って感動的な新入生歓迎の挨拶をされた。次いで挨拶されたU校長先生の話が比較的凡庸であったので、「高校の生徒会というのはすごいんだなあ！」と、感激したのを鮮明に覚えている。

入学早々、ワンダーフォーゲル部に入部した。この部は春と夏の合宿、月一度の山行がそれぞれ部員の義務であった。当時は60年安保闘争の最盛期で、先輩たちもデモに参加しているらしく、「進め！進め！団結固くーー」との歌詞で有名な民族独立行動隊の歌や、国際学連の歌などを山道を歩きながら歌うので、筆者も自然にメロディーと歌詞を覚えることになった。

同年6月15日、日米安全保障条約（安保条約）改定反対の全日本学生自治会総連合（全学連）のデモ隊が国会の南通用門から国会構内に突入し、警備の警官隊と乱闘になり、デモ隊の一員であった東大生の樺美智子さんが死亡したのをテレビニュースや新聞報道で知った。翌日、登校すると、女性の担任の先生は樺さんの死を悲しんで幾分興奮気味であった。6月18日は、安保条約の自然承認の前日で、筆者は、授業終了後学校から繰り出したデモ隊とは別に単独で国会へ向かった。途中、警視庁の周囲を「学友返せ！」と叫びながら、デモ行進する全学連の学生たちを見て、その友情の深さにいたく感動した。

1年生の2学期から、生徒会の役員になった。これを契機に、生徒会活動にのめり込み、2年生になると、日比谷高校や都立大附属高校等で組織する原水爆禁止高校生徒会連絡協議会（原高連）のメンバーと接触し、当校からも8月に台東体育館で開催予定の原水爆禁止世界大会東京集会（原水禁大会）に代表団を送ることになった。そこで、夏休み初頭、当時有志と自民党から共産党までの超党派で構成されていた原水爆禁止日本協議会（原水協）からカンパ活動セット一式を拝借して、新橋、大井町、自由が丘等の駅頭で、駅長の許可を得たカンパ活動を展開した。これには、筆者の他、男女4名の一年生も参加し、数万円のカンパを集め、これを代表団の参加費に充当した。これらの運動を通じて、現在自民党の領袖の一人であるM代議士やA新聞の編集委員のY氏、終末医療で有名なI教授、美術史のN教授等と知り合った。

原水禁大会では核実験を強行したソ連への抗議声明を採択するかどうか論議となり、不採択の方針に反対の立場であった筆者らのグループは退場した。その後、秋の生徒総会で、「ソ連の核実験は平和への警鐘である」旨の声明を採択し、一矢を報いた。

1961年の秋に都内の礪川公園で何かの集会があった。そこで東大教養学部学生自治会委員長であった江田五月（現、参議院議長）の演説を聞いた。内容は忘れたが、岡山弁の訛りが入った朴訥なしゃべり方で、従来の活動家とは異なる魅力的なタイプの指導者であった。その後、退学処分、復学、留学、司法試験合格、判事補任官とマスコミを通じて情報を得る中で、ファンの一人となった。その関係で、長女には「さつき」と命名した。現在、筆者の家には江田五月の後援会「五月会」のお知らせが、毎年届く。

1962年10月に、いわゆるキューバ危機が起こった。一步間違えば、米ソ間の核戦争に発展する恐れがあった。そこで、有志でキューバ大使館への平和的解決希望の要請行動を行った。

1963年に、一期校の受験に失敗した筆者は、当時二期校であった横浜国立大学学芸学部の農業専攻へ入学した。同専攻は当時、鎌倉市雪の下（校舎焼失のため、1965年に横浜市南太田に移転）にあった学部本体から離れた、保土ヶ谷の旧東海道権太坂にあり、農学教室と称していた。学生定員は1学年5名であったが、旧神奈川県青年師範学校から大学昇格当初、農学部開設を計画していたことからか、教授陣は充実しており、植物病理学には菌類（キノコ）の世界的権威今井教授、土壌肥科学には水田土壌の有機酸研究の第一人者松平教授、作物学には稲の分けつ研究で有名な関谷助教授、食品製造学（食品学）には脇田助教授、園芸学には麻生助手が在籍していた。また、蔬菜園芸学、花卉園芸学、果樹園芸学、畜産学、育種学、林学及び農業経営学等にその道で有名な非常勤講師が揃っていた。この中で、勉学に励み、4年次の夏休み以降には、松平先生から分析技術の個人教授を受

けた上で、平塚にあった水田附置の実験室に毎日通い、関谷先生のご指導で、「カルシウムが水稻の分けつに及ぼす影響」と題した卒業論文を書き上げた。

その後、運悪く、必修単位「産業概説」の代替科目「商法第一」（経済学部で開講）の試験を、急性虫垂炎のため受験できず、1年留年となった。5年生のときは、折角の機会と思い、生物専攻や化学専攻で開講中の様々な授業を受講した。このときのいわゆる基礎科目の勉強が、その後の研究生活に大いに役立ったと思われる。

入学当初に、世界と日本の民謡と舞踊を中心とした、歌舞団的な混声合唱団に入部した。

このときの仲間で特に仲の良かった5名とは現在でも親交が深く、家族ぐるみで付き合い、年に数回は1～2泊の旅行等へ出かけている。また、このクラブで伴侶を見つけ、2名の娘を持つことになった。最大の思い出は、会津合宿で公演し、地元の青年たちと交流を持てたことと、1965年の年末に、管弦楽団と他の3つの合唱団と合同で、ベートーベンの第九を演奏したことである。また、1964年～1966年の合唱練習のない夕方、空手道松濤会の町道場で稽古に励んだ。このときの、師範代がその後、「新体道」を開きその道で知らぬ人のない青木先生であった。

1966年の年明けに、学芸学部教授会が学部名を「教育学部」に名称変更する旨の議案を採択したとの情報が、学生の間を飛び交った。学芸学部学生自治会は1月下旬に臨時学生大会を開き、名称変更に対抗との決議を採択し、全学部学生投票の結果を経て、教授会決定の白紙撤回を目指して無期限ストライキに突入した。その後、分校（教養課程）、経済、工学の全学部が次々に支援のストライキに入った。学芸学部学生自治会は教授会との数度の団体交渉、ハンガーストライキ、一般市民への宣伝活動等を実施する中から、「学芸学部（リベラルアーツ）を守る会」を結成し、毎週のように外部講師を招いて、講演会等を実施した。当時の講師の中に

は、務台理作、羽仁五郎、阿部進など当時一流の知識人や自民党の宇都宮徳馬代議士等が含まれ、いずれも、無償の講演であった。

3月下旬には、教授会の「大学全体や外部との関係で、白紙撤回はできないが、手続き等に誤りがあり、学生諸君に迷惑をかけたことを認める」旨の回答を契機に、2ヶ月間のストライキを解除した。この間、農業専攻の学生5名は、教授陣の理解のもとで、一致して、ストライキに参加あるいはこれを支援した。

4 大学院生から農業試験場時代まで

1968年4月に東京農工大学大学院の修士課程農学専攻に入学し、作物学講座に所属した。この講座は、稲の研究を中心とした研究室で、小倉教授、石原助教授、川島助手の3人が先生であった。大学院生は筆者とセイロン（当時）の国費留学生、ラージャカルナ・ドルウイラー君の2人だけであった。

筆者は主として当時30代中頃の石原先生の指導を受け、「水稻葉身の含水量と気象条件の関係について」とのテーマの研究に従事することになった。1年目は大学から約3キロ離れた水田で、2年目は埼玉県鴻巣市笠原の水田で、それぞれ日の出から日の入りまで、1時間ごとに水稻の葉身をハサミで切り取り、トーションバランスで計量し、同時に、浸潤法で同位置の葉身の中央部の気孔開度を測定する日々が続いた。このときの苦労は、筆者のマスター論文に加え、口頭発表4報、学会誌投稿論文3報に結実した。

在学中は全国で学園闘争の嵐が吹き荒れる最中で、1年生の秋に、当大学でも、全学闘争委員会（全共闘）によって農学部本館が封鎖・占拠された。筆者は彼らに心情的には引かれるものがあつたが、冷静に行動した。その後、学生・教職員の説得により、封鎖は自主的に解除され、一件落ち着いた。2年生のとき、政府は「大学管理法（略称）」を国会に上程した。このことに反対して、農学専攻院生会は2週間のスト

ライキに突入したが、ほとんどの教授陣も同法には反対で、筆者らの行動に極めて好意的であった。

1年生の冬に、ストレス解消を目的に東急線自由が丘駅前にあった、合気道自由が丘支部に入門した。ここの師範は、現在、合気道界で道主に次いで高い位置を占める多田先生で、当時から古武士の風格のある武人であった。このとき以降、合気道の稽古は先生を変えながら、細々と現在に至っている。

1970年6月から、当時建設中であった成田空港近くの八街町（当時）にあった千葉県農業試験場落花生育種研究室に勤務することになった。この研究室は農林省（当時）の指定試験地で、わが国における落花生品種改良のメッカで、内外の研究者の来訪が多かった。

人件費を含む運営費の大半は国費であったが、研究員、農業助手各1名と日々雇用職員分の人件費と運営費の一部には県費が当てられていた。

メンバーは、室長には農林省四国農業試験場から来られた竹内氏、前任の研究員には台北帝大を経て北海道大学出身の亀倉氏、同じく予科練出身の石井氏、主任農業助手の神崎氏、農業助手の中河氏（女性）、その他日々雇用職員3名と季節雇用のパート職員が若干名であった。メンバにはユニークな人が多く、楽しい毎日であった。勤務当初は室長を除く4名で宿直を行ったので、週に1～2回程度は研究室に泊りこむ生活であった。その後、宿直が廃止となったので、ホットしたのを覚えている。

当研究室では、当初、育種事業では品種保存栽培を、育種の基礎試験としては育種世代短縮にかかわる落花生未熟種子の休眠打破についての研究に従事した。前者は作物学会での口頭発表1報、後者は同じく3報及び研究報告1報に結実した。

また、この頃、らっかせい農林3号「ワセダイリュウ」、同農林4号「ベニハンダチ」、同農林5号「サチホマレ」、同農林6号「タチマサリ」が育成された。特に、「タチマサリ」はバ

ージニアタイプの晩生大粒種とスパニッシュタイプの早生小粒種とのタイプ間交雑によって育成された「ワセダイリュウ」に再度スパニッシュタイプの早生小粒種を交雑して育成した極早生の大粒種で、現在、静岡県、宮崎県等で栽培され、落花生の理想型「イデアタイプ」として世界的に注目されている品種である。また、「ワセダイリュウ」は現在、鹿児島県にかなりの栽培面積がある。これらの結果の詳細はその後、研究報告4報に取りまとめた。

1976年4月に竹内室長と、亀倉研究員が転出して、後任として高橋室長、長澤研究員が着任した。高橋室長は陸軍航空士官学校から宇都宮高等農林学校（現宇都宮大学農学部）を出られたユニークな人柄で、長澤氏は宇都宮大学大学院農学研究科で花卉園芸学を専攻された温和な人物であった。室長は「ここは第一線部隊だ！」が口癖で、現場に密着した育種研究を目標とされていた。室長とは何となく馬が合い、ご自宅や別荘に招待されたり、千葉市街のスナック等で頻繁に御馳走になった。

このころ、筆者が属していた日本作物学会若手の会所属の会員の誰かが、学会結成50周年記念式典で、年寄り及び中年の代表に並び、若手研究者の代表として講演することが必要になり、何かのはずみで、筆者にその任が回ってきた。そのとき、農業試験場長は心配されていたらしいが、室長はなんら臆せず、躊躇せずに実行するよう、内々に励まして下さった。

その後、筆者は、育種事業では、個体選抜までの初期世代（交配から雑種第6代位まで）を担当することになり、育種の基礎試験としては落花生の登塾にかかわる研究、種子の花芽分化に関する研究等に従事した。また、この頃、らっかせい農林7号「アズマユタカ」が育成された。これらの結果は、作物学会での口頭発表4報、研究報告1報に取りまとめた。

試験場在職中の思い出としては、千葉県農業試験場の県職労研究職部会担当として、千葉県公設試験研究機関連絡協議会代表となり、箱根

で開かれた、全国公設試験研究機関連絡協議会（全公試連）に参加して、議長職を務めたことである。また、これらの運動に関連して、研究室の日々雇用職員全員を定員化することに尽力し、当局と県職労の交渉の結果定員化が実現した。このことは当時、全国的にも珍しいことのようにであった。

5 埼玉大学着任後

1979年2月に埼玉大学教育学部技術学科（当時）に栽培担当の講師として着任した。前年10月の予定が、千葉県の前都で、延び延びになった結果であった。着任直後の大久保農場の収穫祭で、当時の上滝学部長から「貴方の着任を一日千秋の思いで待っていたよ。」と言われた時は、さすがに恐縮したことを覚えている。

着任当初の技術学科は、機械担当の河合教授と山脇教授、電気の豊島助教授、木材加工の勝又助教授、技術科教育の奥谷助教授がメンバーで、河合教授は一年後に退官され、後任として機械ではなく、金属加工担当として松尾講師が着任された。また、栽培に関係の深い教育学部大久保農場には中国戦線帰りの大沢技官が勤務されていたが、1981年に退官され、後任として、当時鴻巣市にあった農林省農事試験場から省庁間移動の形で、細田技官が着任された。

着任後間もなくわかったのは、当学科ではY教授と、K助教授とO助教授連合との間に深い溝があり、着任2年目で学科主任となった筆者の学科運営に大きな支障となった。ところで、Y教授は筆者の出身高校の旧制中学時代の出身で、海軍兵学校を経て横浜高等工業（現横浜国大工学部）の出身でもあり、埼玉大学職員組合員でもあったため、なんとなく親しみを感じ、年下の両助教授に「いじめられる」O教授に同情を禁じ得なかった。あるとき、友人の弁護士にO教授から聞いた「いじめの」内容を話したところ、「その話が本当なら、学問の自由の侵害ということで、大学当局に訴え、それでだめ

なら浦和地検に告訴したらよいのでは。」と真顔で言われたことがあった。

筆者は着任早々埼玉大学職員組合に加入した。翌年、執行委員に当選し、情宣と組合共済保険の担当になり、一応役割を全うした。その後、現在に至るまで、単に組合費を納入するだけの組合員として過ごさせていただいた。この間、組合役員として尽力された諸先生には深い感謝とともに、心からお詫び申し上げる。

（1）教育活動

1）技術科等と合気道部

着任した1979年から共通一次試験（当時）が開始された。この年は新入生が15名入学した。着任2年目の1980年には10名が入学し、筆者は初めての学年指導教官となった。その後は11名～21名の入学で、現在に至っている。当初は、小学校教員養成課程技術専修と中学校教員養成課程技術専攻を別々に選抜していたが、1999年から学校教育教員養成課程教科教育コース技術専修として一本化した選抜となった。ちなみに、2009年度入学生は外国人留学生1名を含めて、18名であった。従って、着任後、筆者の授業を受講した専修（攻）学生の総数は約400名になる。

また、生活科創設前後の約5年間、栽培の科学と技術をサブテーマとした「生活概説」の授業を開講した。受講者は全学部に及び、受講学生の総数は約500名であった。この他、教養教育（一般教育）科目の「科学と教育」、「社会と教育」等を担当した、これらの授業は、全15回のうち1～2回の担当であったが、環境問題やバイオテクノロジーにかかわる今日的な課題を取り上げ、比較的好評であった。受講学生は約10年間で1,000名程度であった。

着任3年目に、国語国文学科の萩原助教授（当時）が顧問教官であった合気道部の顧問補佐、5年目から萩原先生に並び顧問となり、現在に至っている。当初は、放課後、学生諸君と大学の道場で稽古し、居酒屋で懇談することを

頻繁に行った。この頃の卒業生には、その後、結婚式の披露宴に招待されることが多く、技術学科（当時）の卒業生からの招待と相まって、経済的にも忙しい年が多かった。ところで、ここ10年間は、筆者の体調を理由に、ほとんどの行事をご無沙汰している。なお、この間、合気道部で触れ合った学生の総数は1,000名近い人数になる。

2) 卒業研究と修士研究

着任後最初の卒研究生は、8年生と5年生の学生であった。前者は、司法試験に挑戦し、諦めた学生で、宅地建物取引主任の免許を持っているとのこと、後者は東大入試に3回失敗して入学してきたとのことであった。卒研のテーマは、落花生の就眠運動にかかわる内容で、3人で大久保農場に泊まり込んだり、以前、筆者が勤務していた農業試験場を訪れ、圃場の落花生を対象に調査を行った。この両人は昼休みになると、「先生！昼食の時間です！」と、頻繁に筆者の研究室を訪れたので、その都度、奢らされる羽目になったことが、懐かしく思い出される。

2年目、3年目の卒研究生は、1人ずつで、前者は落花生の根毛、後者は落花生の根系にかかわるテーマであった。こちらも頻繁に飲食を共にしながら、比較的丁寧に指導したのを覚えている。

4年目の卒研究生は4名で、テーマは落花生関係2名、ユリの鱗片繁殖関係1名、シランの無菌繁殖関係1名であった。この時は、各人ごとに、毎週1回、30分～1時間ずつ打ち合わせを行い、それに加え、必要に応じて実地指導を頻繁に行う方式を取った。この方式は、現在までの指導のモデルとなった。

その後は、1～5人程度の卒研究生を毎年指導した。テーマは落花生に関するを中心に、酸性雨や紫外線の作物への影響など環境問題に関すること、作物のバイオテクノロジーに関すること等、多岐にわたった。

修士課程成立後は、学部4年生3～4人、修

士1～2名となった。この頃から、卒業研究が8単位となり、3年後期から卒研を開始する形に変更された。テーマも、落花生関係の他、植物と人間とのかかわりに関すること、生ごみ堆肥の施用効果や堆肥の教育利用の効果等々、極めて多岐に渡るようになった。

修士論文のテーマは、落花生の品種間差異、PNVAを用いた落花生の根系観察、体験型環境教育施設、技術科におけるものづくり教育、学校における農業教育、有機性廃棄物の堆肥化、食品残さ堆肥利用の栽培活動による大学生の変容、食品残さ堆肥を利用した栽培活動の教育効果等々であった。それらの成果は、日本産業技術教育学会全国大会及び同関東支部会、日本農業教育学会、日本環境教育学会、日本教育方法学会等で口頭発表させるとともに、一部は埼玉大学教育学部附属教育実践総合センター紀要等に投稿させた。

(2) 研究活動

1) 1979年～1990頃

この時期は試験場時代の成果を生かし、落花生にかかわる研究が中心であった。埼玉大学着任直後は、落花生の育種における世代短縮法に関する研究、落花生さび病抵抗性やナンキンマメ斑紋ウイルス病に関する研究、落花生葉の睡眠運動や日中の閉合運動、あるいは根毛の発生や生育初期の土壤水分と生育・収量にかかわる研究等を実施した。また、らっかせい農林8号「ナカテユタカ」や、同農林9号「ダイチ」、農林10号「サヤカ」、農林11号「ユデラッカ」、農林12号「土の香」の5品種を育成した。

これらの成果は、日本作物学会での口頭発表4報、日本育種学会での口頭発表1報、埼玉大学紀要6報、日本育種学会・多収性育種研究グループ会誌1報、千葉県農業試験場研究報告5報等にそれぞれ取りまとめた。

生育初期の土壤水分とその後の生育・収量にかかわる研究は、当時、極めて貴重な結果として注目された。また、育成品種のうち「ナカテ

ユタカ」はスパニッシュタイプの遺伝子が導入されたバージニア型の品種で、「アイデアタイプ」の一つとして注目されるとともに、現在、茨城県で第1位、千葉県で第2位の栽培面積を誇り、栃木県、静岡県、宮崎県、鹿児島県等でも栽培される広域適応性の極めて優秀な品種である。さらに、「サヤカ」も茨城県や静岡県での栽培面積が比較的多い優良品種である。

2) 1990年頃～2000年頃

このころ、ある尊敬する先輩の先生から、「教育学部の教官なのだから、できるだけ教員養成に関係ある研究もされたらどうですか」との旨のご助言を頂いた。また、当時、他専攻に遅れていた修士課程技術専攻の設置に際し、筆者が技術科教育の合教官になる必要があったことから、教科教育にかかわる研究論文等が必要となった。そこで、パソコンを利用した翻訳システム、機械制御や画像処理にかかわる研究等を実施し、その成果を埼玉大学紀要4報、日本農業教育学会誌2報に取りまとめた。

また、技術・家庭科の栽培領域（当時）や当時筆者が開講していた「生活概説」の授業等にかかわる研究を実施し、その成果は日本産業技術教育学会、日本環境教育学会、日本農業教育学会等で11報にわたって口頭発表するとともに、埼玉大学紀要、日本農業教育学会誌、環境教育（日本環境教育学会誌）等11報に取りまとめた。

さらに、「資源・エネルギー及び環境の教育とその教材開発に関する研究（全8報）等、環境教育にかかわる研究を開始しその成果を日本環境教育学会、日本産業技術教育学会、日本農業教育学会、日本農作業学会等に26報にわたって口頭発表するとともに、埼玉大学紀要、環境教育、日本農業教育学会誌等14報に取りまとめた。

3) 2000年頃～現在まで

前半は、バイオテクノロジーの教材化に関する研究、栽培や環境にかかわる体験の教育的効果に関する研究、落花生の教材化に関する研究、

植物と人間とのかかわりについての研究等を実施し、その成果を日本産業技術教育学会、日本農業教育学会、日本環境教育学会等に31報にわたって口頭発表するとともに、埼玉大学紀要、埼玉大学教育学部附属教育実践指導センター紀要、同教育実践総合センター紀要、日本農業教育学会誌等12報に取りまとめた。

後半は、(株)アイル・クリーンテックとの共同研究や埼玉県農林総合研究センターの受託研究にかかわって、生ゴミ（食品残さ）の施用効果や、堆肥を活用した栽培活動の教育効果等に関する研究を主とし、これに加え、遺伝子組換えや環境教育に関する研究等を実施した。この成果は、日本産業技術教育学会、日本農業教育学会、日本産業技術教育学会等で17報にわたって口頭発表するとともに、日本農業教育学会誌、埼玉大学紀要、埼玉大学教育学部附属教育実践総合センター紀要等15報に取りまとめた。

6 日本教育大学協会全国技術教育部門の思い出

1997年～2001年に、松尾教授（当時）が日本教育大学協会の全国技術教育部門（以下、部門）の代表を務めた。その関係で、筆者が事務局を担当することになった。1995年から部門の常任委員を務めていたので、規約上兼任となった。

当時は、2002年から実施予定の教育課程の改定内容が、かなり煮詰まってきた頃で、技術・家庭科、とりわけ技術分野（以下技術科）の教科内容の充実等のために尽力すべき時であった。そこで、松尾代表、前代表で副代表の千葉大・隈部教授（当時）、会計の横浜国立大学・矢田教授（当時）、部門内の研究組織である技術教育研究委員会委員長の東京学芸大学・田中教授、加えて筆者の5人で執行部を組織して、東京で頻繁に会合（事務局会議）を開き、様々なイベントを企画した。

通常、部門は6月頃に常任委員会、8月頃に

全国委員会と総会等を開催し、11～12月頃の常任委員会を経て、2月頃の日本教育大学協会全国研究部門連絡協議会に部門代表が参加するのが一年の流れであるが、この頃は、これらに加え、部門と日本産業技術教育学会及び全日本中学校技術・家庭科研究会の三者共催あるいは部門独自で、様々な研究会・集会を実施した。これらの集会等には多くの先生方が参加され、多くの成果が得られたので、技術科の振興のために大いに役立ったものと思われる。

また、隈部副代表を中心に「科学技術と経済の会」の只野氏を会長とし、執行部と経済界の技術屋や業界紙の記者等をメンバーに「技術教育を考える会」を結成、都内で約30回にわたって研究会を開催し、技術科の宣伝と理論武装に努めた。この研究会の成果は、メンバーでもあったN新聞の記者等を通じて、教育課程編成に影響を与えたものと確信している。

また、部門の1999年／2000年度総会が1999年7月29日に開催されたが、これに合わせて、技術科の宣伝活動の一環としての「いわて子どもものづくりセミナー」を7月下旬に開催するために、4月下旬に岩手県教育委員会、岩手県PTA連合会、盛岡市子ども科学館、盛岡地域地場産業振興センター、岩手大学、岩手県技術・家庭科研究会等を訪問した。初日の夕刻、岩手大学の横尾助教授（当時）と居酒屋で、懇談、このとき、松尾代表、隈部副代表、筆者等は店の入り口で土下座同然の姿で、丁寧にイベントの音頭取りをお願いしたところ、「そこまでされるなら」と、心良く引き受けて下さったことが思い出深い。

このセミナーは、全県から選抜された中学生と引率の先生方、岩手県技術・家庭科研究会の構成員の先生方の他、部門の全国委員会や総会に出席される部門構成員の先生方も多数参加され盛況であった。筆者の研究室の学生達もマイクバスで来訪し、男女中学生の鑄造等のものづくり活動を興味深く見学していた。また、このイベントは地元の新聞記事やテレビ放映の形

で、全県的に注目された。

この期の部門活動の最大の功績は、ゼンキン連合（当時）の地道な努力によって、組織内国会議員を中心に、超党派の議員立法で成立した「ものづくり基盤技術振興基本法」の第16条に「一小学校、中学校等における技術に関する教育の充実をはじめとする学校教育及び社会教育におけるものづくり基盤技術に関する学習の振興、一」の文言を入れるように働きかけたことと思われる。この具体的な条文が、その後の小・中学校における「技術教育、ものづくり教育」の振興の契機となったことは疑いのないことであろう。

なお、“小学校、中学校等”は当初の案では、部門の普通教育としての技術教育の構想に従って、“小学校、中学校及び高等学校等”となっていたが、高等学校に普通教育としての技術教育の教科等を新設することに繋がることを懸念した文部省（当時）の強い意見によって、上記のような表現となったと聞いている。

ところで、同基本法の成立を祝うゼンキン連合主催のパーティーに、来賓として出席していた連合の笹森事務局長（当時）は、筆者との短時間の懇談の中で、この条文の精神の実現については日教祖とも連携してほしい旨の発言をされたこと記憶している。

ところで、同基本法と車の両輪の役割を担うと思われる、日本の科学・技術振興を目的とする科学技術基本法の第19条には「一学校教育及び社会教育一」、技術科の「生物育成」に関係すると思われる「食料・農業・農村基本法」の第25条には「一農業に関する教育の振興一」とあるのみで、教育の対象についての具体的な記述はない。

7 おわりに

思いつくままに書きしたためきたところ、研究にかかわる部分が半分程度と、この種の文章としては異例のものとなったようだ。だが、

これこそが、筆者の心境を如実に語っているものとも思われる。

ところで、教師の義務教育段階の子供への影響力は極めて大きいと思われる。筆者の場合、小学校での小野先生、中学校での辰嶋先生が正にそうであった。技術専修受験学生への面接試験やアンケート調査の結果でも、志望動機のかなりの部分が、中学生時代における素敵な技術科教師等との出会いである。

さて、筆者は現在までに66名の卒業研究生を持った。このうち約6割の40名が教員になっている。仮に、彼らが35年間、毎年新しく、40名の子供を直接教える立場にいるとすると、教える子供の総数は56,000名となる。もし、筆者がこの40名の教師に何らかの影響を与えているとすれば、間接的に56,000名の子供たちに影響を与えたと考えられないだろうか。

このことを、筆者が4年間にわたって授業を持った技術科の卒業生約400名全体に拡大すれば、336,000名となり、これに「生活概説」の

受講者約500名を加えれば、756,000名となる。さらに、教養教育の受講者や合気道部の学生の中で教員になるものを加えれば、この数は極めて膨大なものになる。

このように考えると教育学部教員は教えた学生を通じて、多くの子供たちに影響を与える存在であり、授業の1コマもおろそかにできないことはもとより、普段の学生との接し方、対話の仕方等、コミュニケーションの方法に十二分に注意しなければならないと思われ、筆者は大いに反省しているところである。

最後に、このような雑文を書く機会を与えて下さった、技術教育講座の諸先生、紀要担当委員会の諸先生等関係各位に厚くお礼申し上げるとともに技術教育講座をはじめ、教育学部いや、埼玉大学が益々発展することを祈念して、筆をおくことにしたい。

(2009年9月25日提出)

(2009年10月16日受理)